

平成27年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成27年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ハタハタ

学名 *Arctoscopus japonicus*

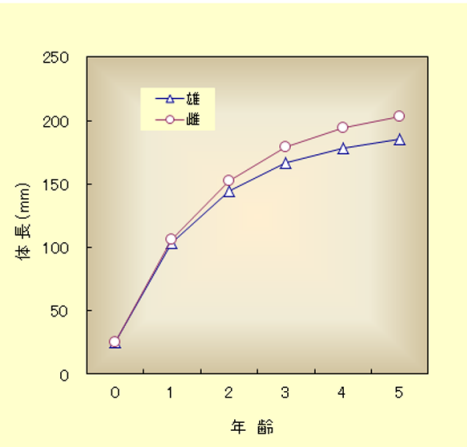
系群名 日本海西部系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命： 5歳（年齢および年級はふ化した年を起算年として表記）
成熟開始年齢： 雄：1歳（50%）、2歳（100%）、雌：2歳（100%）
産卵期・産卵場： 12月、秋田県沿岸、朝鮮半島東岸
索餌期・索餌場： 島根県～石川県沖合
食性： 端脚類、橈脚類、オキアミ類、イカ類、魚類
捕食者： マダラ・アカガレイ

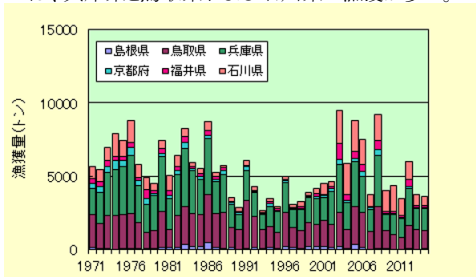


漁業の特徴

兵庫県と鳥取県では沖合底びき網(沖底) (1そうびき)、京都府以北および島根県では小型底びき網によって主に漁獲される。漁期の中心は3～5月である。

漁獲の動向

漁獲量は、1970年代から1980年代半ばには8,000トンに達する年もあったが、1980年代後半に減少し、1990年代は5,000トンを下回る年が多くなった。1990年代後半から増加し、2003年に過去最高(9,500トン)となった。その後、1～2年ごとに増減を繰り返していたが、2009年からは4,000トン前後で推移し、2014年は3,614トンであった。府県別では、兵庫県と鳥取県および石川県の漁獲が多い。



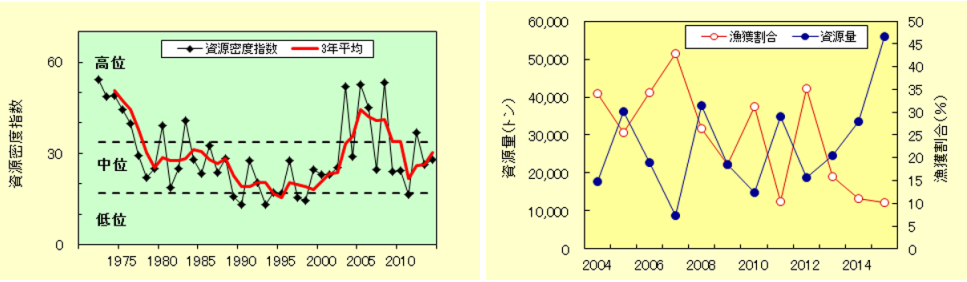
資源評価法

沖底の資源密度指数に基づき、資源水準を判断した。その際、本種特有の数年ごとの半減・倍増の影響を取り除く目的で、3年の平均値(当年、前年、前々年の平均)を用いた。また、トロール調査結果から面積密度法を用いて推定した資源量により動向を判断した。

資源状態

トロール調査による資源量は9千～5.6万トンまで大きく変動している。2013年以降は増加傾向にあり、2015年は5.6万トンであった。資源密度指数の3年平均の最高値(50.6)を3等分し、高位と中位の境を33.7、中位と低位の境を16.9とした。2012～2014年の平均は30.3であり、水準は中位と判断した。直近5年(2011～2015年)の資源量の推移から、動向は増加と判断した。





管理方策

現状の漁獲係数 $F_{current}$ (0.14) は2015年の資源量を維持しうる F_{med} (0.33) より低く、現状の漁獲圧で漁獲を続けても、資源量、親魚量および漁獲量はいずれも2020年には現状より増加する。このため、現状の漁獲圧を維持する $F_{current}$ を管理基準として、2016年ABCを算定した。

管理基準	Limit/Target	F値	漁獲割合 (%)	2016年ABC (百トン)
1.0・ $F_{current}$	Limit	0.14	13	62
	Target	0.11	10	51

- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量
- Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の増大または維持が期待される漁獲量。 $F_{target} = \alpha \cdot F_{limit}$ とし、係数 α には標準値0.8を用いた
- ABC 算定の規則の1-3)-(2)に基づき、 F_{limit} は現状の漁獲係数($F_{current}$)に β_1 を乗じることとし、 β_1 を1.0とした
- 漁獲割合は2016年のABC／資源量
- ABCは十の位を四捨五入した

資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は増加
- 資源量は2013年以降増加傾向にあり、2015年は5.6万トンであった

管理方策のまとめ

- 現状の漁獲圧でも資源量と親魚量は増加することが予想される
- 現状の漁獲圧を維持する $F_{current}$ を管理基準として2016年ABCを算定した

執筆者: 藤原邦浩・上田祐司・松倉隆一・山本岳男・山田達哉

資源評価は毎年更新されます。